

関連学会印象記

日本小児麻酔学会第14回大会

竹内 護*

日本小児麻酔学会第14回大会は、杏林大学医学部麻酔科学教室教授の巖康秀先生を会長として、まだ残暑の厳しい2008年8月29日(金)、30(土)に東京の都市センターホテルで開催された。今回は、初日は「小児がんの緩和ケア」を大きなテーマとされ小児がんの緩和ケアに関するシンポジウムが、国立がんセンター中央病院の下山直人先生により企画されていた。2日目は「小児救急医療」をメインテーマとされ、午後に小児救急に関するシンポジウムが国立成育医療センターの羽鳥文麿理事長により企画され、プログラムの最後を飾った。岩井誠三記念講演と特別講演が1題ずつ、教育講演が2題、シンポジウムが2企画で、一般演題は全てポスター発表で59題がテーマごとに分類されていた。大会参加者は、約300人と盛況であった。

最初のシンポジウム「小児がん緩和ケア」は、小児の緩和医療の現状と問題点など5題が発表され、麻酔科医と小児科医の小児緩和医療での接点や今後の方向性などについて、熱い議論が交わされた。今までは、学会のシンポジウムとして採り上げられることは少ないテーマであったが、誠にタイムリーな企画であった。今後、小児の分野においても緩和医療に積極的に参加する麻酔科医は増加するであろう。

午後の教育講演1「子ども達とトータルケア」は、聖路加国際病院小児科の細谷亮太先生がご講演をされた。長年にわたる小児がん治療のご経験から、子どもの心の問題に踏み込んでお話をされた。年齢によって様々に変化する子ども達のかたわらで、私達医療者は何が出来るのかをトータル

ケアの見地からお話いただき、大変参考になった。

Pittsburgh 小児病院の Brandom 教授のセミナー「The Use of Rocuronium in the Practice of Pediatric Anesthesia」は、豊富な臨床経験に基づいてロクロニウムのお話をされた。当日からでも小児麻酔の実際の臨床に役立つ内容であった。

ハンズオンセミナーが3種類4題、講演に並行して行われていた。シミュレーション教育と中心静脈穿刺に関するセミナーであったが、どの会場も参加者が入り切れないほど人気があった。今後こうした企画は、若い参加者を中心に、学会の目玉の一つになっていくと思われる。一般演題発表も、小児麻酔学会らしく熱意あふれる討論が行われていた。

2日目午前中のメインである岩井誠三記念講演は、Smith's Anesthesia for Infants and Children の Editor である Pittsburgh 大学教授の本山悦郎先生に、「Half a century of pediatric anesthesia in America: A personal recollection of a physician scientist」のご講演をいただいた。本山先生は小児麻酔の先駆者であり、特に小児呼吸生理の領域では世界的に有名で、50年に渡る研究生活のご苦労やご経験を中心にお話をされた。1960年代以降の米国の麻酔器や麻酔関連の諸用具がプレゼンテーションで示され、大変興味深く聞かせていただいた。日本の現在の小児麻酔の発展には、こうした先駆者の方々のたゆまぬご努力があったことを思い知らされた。

教育講演2の「小児救命集中治療におけるシミュレーション教育の有用性と遠隔教育の可能性について」は、君津中央病院救命救急センター救急集中治療科の清水直樹先生がご講演をされた。小児救急医療におけるシミュレーション教育の重要性を強調され、今後の小児麻酔、小児救急医療の

*日本小児麻酔学会財務理事

とちぎ子ども医療センター小児手術・集中治療部

教育の進むべき方向性を考えさせられた。

午後の特別講演は、「日本の小児麻酔の半世紀」と題して長野県立こども病院長の宮坂勝之先生がご講演をされた。国立小児病院時代を含む日本の小児麻酔発展の50年間の歴史を中心に、アメリカやカナダでのご経験を交えてお話いただいた。日本の小児麻酔のリーダーである宮坂先生や国立小児病院時代からの先生方の熱意と努力に感銘を受けた。特別講演にふさわしい内容であった。

最後のシンポジウム「小児医療におけるミッション～小児救急医療との連携を探る～」では、幅広い視野で活発な討論がなされた。日本の小児救急医療の現状と問題点、麻酔科医以外への小児救急医療の教育、在宅人工呼吸、小児麻酔領域の研究など5題が発表された。このシンポジウムの立案者で理事長の羽鳥先生が大会前日に急病のため出席できなくなり、座長の埼玉医科大学総合医療センターの宮尾秀樹先生が代理で発表された。

「羽鳥先生の最も強調したかったことは、小児救急医療を発展させるためには小児麻酔の研修を充実させることが最も重要である、と言うことである。」とまとめられたが、羽鳥先生のメッセージは、全ての発表を通じて、充分会場全体に伝わっ

たように思われた。このシンポジウムには、特別参加として自治医科大学とちぎ子ども医療センター長、小児科学教授の桃井真里子先生が出席された。現在の小児救急医療の問題点、今後の展望などを小児科医の立場からの確にご指摘いただき、羽鳥先生の期待通りのご発言であった。

会員懇親会など含めて、大会を通じて巖会長の温かいお人柄が伺える素晴らしい集会であった。飯島先生をはじめ杏林大学麻酔科学教室のスタッフの皆様も、急な理事長不在もあり、大変なご苦労があったと考えます。幸い羽鳥理事長は順調にご回復しておられると聞いておりますので、全快を心よりお待ちいたしております。

第15回大会は長野県立こども病院麻酔科部長の大畑淳先生を会長に、2009年9月25、26日に長野県松本文化会館で開催される。学会での熱い討論とともに、信州の秋を満喫できればと考えている。日本麻酔科学会の関東・甲信越地方会と同時開催であり、両学会への参加は格安で可能と伺っている。日本小児麻酔学会といたしましては、多くの会員の皆様が参加して下さることを切に願っております。よろしく願い申し上げます。